

# 深志同窓会々報

題字 中山久四郎  
 (松中10回 文学博士)  
 発行所 深志同窓会  
 松本市蟻ヶ崎3-3-1  
 深志教育会館内  
 発行人 中嶋嶺雄  
 編集 広報委員会  
 印刷 電算印刷株式会社  
 http://www.fukashi-alumni.org/



中嶋会長 対談 内川副会長

## 若い世代の参加期待

### 活性化へ広報体制強化

#### 会報年一回に定期化 HP大幅リニューアル

深志同窓会は広報体制を強化して活性化を図ることになりました。不定期刊行だった同窓会報を毎年一回の定期発行とし、ホームページ（HP）を大幅にリニューアルしました。開校百四十周年を視界にとらえたいま、母校同窓会の伝統に新しい活力をどう吹き込んでいくべきか。中嶋嶺雄会長と内川小百合副会長に対談をいただきました。

**内川** 同窓会長も二期目になります。現在のお気持ちはいかがですか。

**中嶋** 最初、私で務まるのかどうか心配でした。松本に常にいるわけではありませんが、重い責任を考えると内心忸怩たるものがありました。副会長をはじめ役員の方々が大変よくサポートしてくださり、感謝しております。

**内川** 深志同窓会としては中嶋先生においでいただいたことは大変ありがたいことです。同窓会がこんなふうになればいいという

お考えはありますか。

**中嶋** 会長として各支部等の集まりにも出席しますが、それぞれ盛んにやっている中で、出席者が高齢化し、若い人の参加が少ないように感じます。われわれの年代になると懐かしさから集まってくるのですが、若い人をいかに引きつけていく



中嶋会長

かが課題ですね。どこの同窓会もそうだと思いますが、若い人にとつて魅力のある同窓会にしていきたいと思っています。そんな中で、今回同窓会報が年一回発行されたり、HPが充実したことは、総会などのお知らせをするのを含めて、大変よいことだと思います。

**内川** 総会のお知らせとHPを有効に活用したいですね。

**中嶋** やはり会報とHPは知られていませんし、総会開催のお知らせは新聞にも掲載されています。でもその新聞を読まなければ意味をなさないので、HPは新聞掲載も全国にいる同窓生にもなるべく情報が伝わるわけではありませぬ。

**内川** 同窓生の活動をみると、六十代から上の世代にくらべて四十代から下の世代の同窓生の関わりが少なくなりますが、今回のHPリニューアルでは若い人がよく動いてくれました。若い世代も声をかければよくやってくれます。委員会の中に若い人を入れていくことで組織も活性化されます。これからの時代はどういう同窓会をつくりたいか、ということをお聞きしたいですね。同窓生には深志高校はいい学校だと誇りに思っている人が多くいると思います。その人たちにホームカミングしてもらおうということが大切ですね。

**中嶋** 本間にそうなんです。同窓会もいろいろ変わってきたと思うのですが、会長としてこれから進めていくべきことは何ですか。

**内川** 同窓会の運営や教育館などの施設の維持管理にどれだけの必要で何に使うのか、同窓会の運営に関してもっとオープンになってもいいと思います。新入生からいただく入会金に大きく依存している現状は考え余地があると思います。例えば卒業二十周年になったら会費を徴収する、とかの方法ですね。あまり若い卒業生からは会費をいただくには難しいですね。

**中嶋** いま一番大きいのは深志教育会館を今後どう維持していくか、ですね。無理のない会費を設定して同窓会員からいただくことができないでしょうか。ほかにも賛助会費を募るとか、ポケットマネーをお願いするとか。年間一千万円前後の経費がかかるのであれば、深志同窓会の底力をもって

### 残したい知的文化遺産

**中嶋** 当面の同窓会の大きな課題は百四十周年をどうしていくかということですね。百三十周年の時は皆様のご協力で立派な深志教育会館を造りましたが、今度の百四十周年は皆さんのお知恵をお借りして、ハード面ではなくソフト面がいろいろ考えられますので、知的な文化遺産が残るようなものにしていきたく思います。

**内川** 何か同窓会としてやってみたいですね。

**中嶋** それにつけても同窓会運営のためには安定的な財源の確保が大事です。一般的には、高校を卒業し

てから同窓会の会員になるのに、わが同窓会は高校に入学したときに入会金を払ってもらって会員になっています。そして同窓会の収入の殆どを新入生に頼っているのが実情です。現状と違った方向に急転換するのは難しいかもしれませんが、同窓会本来のあり方からすればいいかなものではないでしょうか。自分たちも会費を払うことで同窓会員としての自覚も出てくるのではないのでしょうか。正副会長会議でも議論をしていきたいと思

います。

**内川** 同窓会の運営や教育館などの施設の維持管理にどれだけの必要で何に使うのか、同窓会の運営に関してもっとオープンになってもいいと思います。新入生からいただく入会金に大きく依存している現状は考え余地があると思います。例えば卒業二十周年になったら会費を徴収する、とかの方法ですね。あまり若い卒業生からは会費をいただくには難しいですね。

今日はお話を伺ってきて中嶋会長の同窓会に寄せる思い、同窓会の課題などが改めて分かってきました。この同窓会報が発行されたのち、いろいろとご意見をHPにお寄せいただきたいと思います。母校の同窓会がより発展するように知恵と力を貸していただきたいと念じております。

知識基盤社会（Knowledge based society）の、深志と松本をアピールしていくことにもなると思います。

**内川** 同窓会は一つの知

的集団として、立派な先人たちのアピールすることで、若い人たちのホームカミングに繋がるといいですね。

**中嶋** 私のいる国際教養大学では大学の折、同窓生も参加してシンポジウムなどを行っています。深志にもとんぼ祭がありますが、そこに同窓会も一緒になつて何か行うのもいいと思います。深志同窓会の特徴でもある尚学塾もそうですが、われわれ大人の方から仕掛けを作ってやらないといけないですね。



内川副会長

深志同窓会は一つ

深志同窓会は一つ



卒業60周年で集まった深志3回生(上)と4回生(下)

# 絆を結ぶ深山会 60周年でDVD

3回生

深山会は毎年春秋二回の定例会と、周年行事・記念文集の発行を行ってきた。六十周年では文集の発行に代わり、あの時代をDVDに残すこととした。在学当時の写真や当時の雰囲気や伝言などが寄せられた。映像関係に詳しい仲間が構成や編集に当たった。

府)のあと全員で「信濃の国」の大合唱。記念DVD「深山の蜻蛉」を上映した。祝賀の宴に先立ち、多くの物故者を偲んで黙祷を捧げた。東京深山会の司会による大パーティーでは、全国から集まった仲間が一つになって交流した。応援歌

と校歌の大合唱で幕となった。二日目はバス二台を仕立てて観光を楽しんだ。長峰山の山頂から一望する山なみや松本平、安曇野は絶景だった。母校や深志教育会館も訪問。会員からは「みんなに会えてよかった。周年行事は必ずやる。卒業七十周年はいいか。互いに意気軒昂で」などの声が聞かれた。(3回卒・山口尚男)

# 八十路かみしめ 熱き再会の喜び

4回生

六十周年祝賀行事は平成二十三年十月二十三、二十四日の両日、安曇野市の穂高ビューホテルで開催した。会員八十四人と同伴の夫人十九人の計百十三人が参加した。

福岡から参加した福岡教育大名譽教授で指揮者の内山信君率いる「九友合唱団」が祝賀会のオープニングを飾った。合唱組曲「太宰

深志四回生の卒業六十一年の集いは、平成二十四年十月二十三日に九十六人が参加して開かれた。百瀬康雄校長の案内で母校見学をしたあと、深志教育会館で式典と講演会を催した。亡き恩師と百十人余の友に黙祷を捧げ、校歌を斉唱

して開会した。講演会の講師は、県立高校初の中高一貫教育校として学習指導に取組む屋代高校の高橋康人校長。長野高校卒で、深志の教頭と校長を各二年務めた。「不易と流行」を演題に、他校出身者の深志観、深志在任中の深志生、現在

の教育環境を背景にした伝統校の在り方などを語った。「八十歳にあつての稚心など深志で学んだことを屋代でも育て上げたい」などと語った高橋校長の講演に

# 50年の歳月は夢 のように流れた

13回生

平成二十三年三月十一日、東日本を襲った未曾有の地震と津波、そして原発による惨事は、何ら解決も見えず生々しく、われわれの卒業五十周年記念事業は、はるか遠い昔のように思える。五十周年記念事業は、年間を通して行った。平成二十三年二月十三日に厳冬の美ヶ原高原王ヶ頭ホテルで新年会。五月十四日に名古屋で関西同期会。七月一日から十日までわが同期会のゴルフの極楽トンボ主催の「氷河鉄道旅行」。九月二十一日正午に「イタリアフィレンツェのヴェッキオ橋で会いましょう」。

くり、収穫祭をした。こうしたさまざまな行事の中で五十年ぶりの出会いがあった。懐かしくもあり嬉しくもあった。(13回卒・山根伸右)



マッターホルンを背に「氷河鉄道旅行」の13回生(上)と盛大な懇親会を開いた14回生(下)。節目を飾る再会を喜び合った

# 尚学塾特別講義 仲間10人が担当

14回生

深志十四回生の卒業後五十周年の集いが平成二十四年九月二十二、二十三日の両日、深志教育会館と松本市のホテル翔峰を会場に開かれた。

り、多彩なテーマに沿って一年生に語りかけた。教育会館での記念式典では母校に五十万円を寄付した。追悼の辞のあと、同窓生が演奏するフォーレの「レクイエム」が流れるなか、ともにこの日を迎えることのできなかつた三十八人の同期生に献花をした。ホテルでの宿泊宴会には

新たな伝統として定着した「尚学塾特別講義」は十人の仲間が担当した。同期生の大学教授三人と企業人五人、医師二人が講師とな

卒業生が取り組む周年事業は、創立百三十周年を記念して建設された深志教育会館をよりどころとして行われています。平成二十三年中には二十三年生が卒業四十周年事業を行い、三十三回生は三十周年を祝いました。二十四年には二十四回生と三十四回生がそれぞれ四十年と三十年で母校に集まりました。節目の周年を迎えた各年次からは、母校援助の寄付が寄せられました。天体望遠鏡や放送装置の修理、講堂の照明設備に充てられるなど、在校生の学習環境の向上のために有効に使われています。

# 周年事業に 活動費支援

百五十三人が参加した。九十歳を過ぎてドイツ語で聖書を読み始めたという岩垂潔先生をはじめ、猪瀬紀元、柴野武夫、山岸強の各先生からは「年齢などに関係なく、これからも何かに挑戦していったほしい」と逆に激励された。各部屋での歓談は深更に及んだ。(14回卒・木内義勝)

# 年次会で群舞する蜻蛉たち

深志同窓会のHPがリニューアルされました  
<http://www.fukashi-alumni.org/>



「世代を繋ぐ情報発信」をテーマに深志同窓会のホームページがリニューアルされました。同窓会の皆さんにとってこのホームページがよりどころになりますように……という思いで、同窓会の最新の情報を素早く提供していきます。

この公式ホームページの開設に合わせて、Facebook上にも、深志同窓会のページを用意しました。  
<https://www.facebook.com/fukashi.alumni>  
深志同窓会の皆様の忌憚のないメッセージをお待ちしています。

若い世代の取り組みも目立ち、四十二回生は昨年、卒業二十周年を祝いました。式典で百三十周年の記念DVDを上映して、母校に寄せる先輩世代の熱い思いに触れました。五年ごとの取り組みも盛んになり、最近では十九回生の四十五周年の集いがあります。深志同窓会は二十二年度総会で、活性化策の一つとして卒業後の周年事業を実施する年次に活動費の支援を決めています。

# 各地の空で高く飛ぶ

## 関西支部

平成二十四年十一月の総会で有田直之支部長(13回卒)が退任し、新支部長に平出敦氏(24回卒)が就任しました。六月の新入歓迎会、春と秋のハイキングも

## 東海支部

支部の会員は約三百五十人。総会は昨年十一月九日に名古屋市内で開かれ、母校の百瀬康雄校長は

毎年開催しています。(28回卒・宮坂均)

## 東北支部

役員を一新しました。新体制による総会兼歓迎会を平成二十四年六月二日、JR仙台駅前ホテルで行いました。新入生九人と会員

## 組織改編を承認

### 深志同窓会定期総会で

深志同窓会の平成二十四年度定時総会は昨年九月二十九日、深志教育会館で開かれました。議事では事業の報告と計画案、決算報告と予算案などの各議案が原案どおり可決されたほか「委員会について」と「百年館について」の議案が提出されました。「委員会について」は今年度

二十七人が参加して盛會でした。東日本震災に伴う多額の義援金を日本赤十字社に寄付させていただきました。(21回卒・牧野恵子)

## 教育会館を管理運営

深志尚学会



関西支部で行っている「ぐるっと大阪平野」の7回目のハイキング(葛城山)

財団法人深志尚学会は昭和二十八年に、同窓会の財産管理を目的に設立されました。中嶋嶺雄同窓会長が理事長を務めています。約二億五千万円の正味財産を持つという県立高校関連では県内最大規模の法人です。主な事業は深志教育会館

の管理と運営、生徒の学力向上のための助成などで、収入の大半を同窓会、年次会からの寄付に頼っています。新たな公益法人制度への対応では、深志高校との関連の強い事業が中心であることから平成二十四年四月に一般財団法人に移行、登記を終わりました。教育会館の建設により、貸館事業を行うことになったため事業規模、必要経費ともに従来とはレベルの違う法人となっています。平成二十三年の利用状況は同窓会関連三十八件、学校関連三十三件、一般十五件の計八十六件でした。

## 《同窓会支部》

| 支部  | 連絡先                              |
|-----|----------------------------------|
| 東 京 | 支 部 長 中村 胤夫(深志7回) 03-3494-1240   |
|     | 副支 部 長 中藤 照美(松中68回) 03-3990-6175 |
|     | 事 務 局 松森 弘素(深志17回) 03-5272-6615  |
| 関 西 | 支 部 長 平出 敦(深志24回) 06-6840-2994   |
|     | 事 務 局 宮坂 均(深志28回) 090-9219-5756  |
| 東 海 | 支 部 長 釘持 一郎(深志6回) 052-773-3628   |
|     | 事 務 局 湯田 尚雄(深志25回) 0561-52-2887  |
| 東 北 | 支 部 長 本間 基文(深志7回) 022-243-2233   |
|     | 事 務 局 山田 文雄(深志23回) 022-378-7581  |

| 支部    | 連絡先                             |
|-------|---------------------------------|
| 九州山口  | 支 部 長 竹淵 弘(深志6回) 092-725-8620   |
|       | 事 務 局 田中 茂(深志14回) 093-591-0798  |
| 東 北 信 | 支 部 長 永野 國夫(深志10回) 026-237-6079 |
|       | 事 務 局 青木 敦(深志15回) 026-226-8755  |
| 大町北安曇 | 支 部 長 栗林 士郎(深志8回) 0261-22-2126  |
|       | 事 務 局 桂川 哲三(深志28回) 0261-62-2167 |
| 安 曇 野 | 支 部 長 土橋 正啓(深志6回) 0263-82-2133  |
|       | 事 務 局 平林 良治(深志8回) 0263-72-3731  |
| 螢 雪 会 | 事 務 局 中野 永吉(定時5回) 0263-35-3076  |

昨年十月、卒業六十年記念行事の折、深志四回生の皆さんから藤岡改造先生の短冊を学校に寄贈いただきました。揚雲雀母校は今も山を背に

筑邨

青空高く舞い上がったひばりと真っ白な北アルプスを背景に、茶褐色のスクラッチスタイル張りの校舎が厳と聳え立つ風情でしょうか。本校を見学に来る人は必ずといっていいほど風格ある第一棟の写真を撮っています。中に入ると階段の床板は角が丸くすり減り、人の通る左右の両側がへこ



昭和の終わりに床板の張り替えをした際、藤岡先生の発案により階段だけはこれまでの材を使用しました。短冊からそんなことも思い出されます。

平成十二年に新築された昇降口棟と第二棟が西と北に昔ながらの第一棟と講堂が南と東に建ち、四つの棟がインターロッキング舗装の中庭を囲んで、新旧の調和

## ごあいさつ

校長 百瀬 康雄

国の登録有形文化財であり、喜寿を迎えた第一棟と講堂は今もなお健在で、一昨年の松本地震で震度5強の揺れにもびくともしませんでした。現在の校舎は、

がとれたスクエアを形成しています。来校の折には、ゆっくりご覧ください。さて、同窓会の皆様には物心両面から大変お世話になっており、感謝申し上げます。

る学校ですので、県費では賄えない部分も多々ありまして、大変ありがたく感じています。また、教養講座、補習、模擬試験など土曜日に行っ

ている尚学塾では、その運営費を同窓会とPTAから援助していただいています。が、新学習指導要領の本格実施に伴い、来年度から隔週土曜日に正規の授業を行うことになりました。松本地区の公立高校では本校だけ土曜日に授業があることになり、さまざまな課題も多いわけですが、生徒の進路実現めざし、地域の期待に応えるために、職員一同全力で取り組む所存です。

同窓会の皆様には、今後も変わらぬご支援をお願い申し上げます。維持費、運営費について一層のご理解とご協力をお願いいたします。

## 会報18号発行以降母校援助費としての寄付金一覧表

|            |            |  |
|------------|------------|--|
| 平成23年      |            |  |
| 50周年深志13回  | 500,000円   |  |
| 40 〃 深志23回 | 500,000円   |  |
| 30 〃 深志33回 | 500,000円   |  |
| 平成24年      |            |  |
| 50周年深志14回  | 500,000円   |  |
| 40 〃 深志24回 | 500,000円   |  |
| 30 〃 深志34回 | 1,000,000円 |  |

## 東日本震災義援金

日本赤十字社への寄付(東北支部より) 6,819,030円  
その後の預かり義援金(NHKへ) 183,870円

## 深志教育会館 維持管理協力金

6,539,480円

## ご協力を!!

住所変更・改姓などの時は同窓会事務局へご連絡を。

電話・FAX 0263-39-2081

メールアドレス jimukyoku@fukashi-alumni.org



平成24年度定時総会(平成24年9月29日)

# 尚学塾特別講義

教頭 太田道章

同窓生による尚学塾特別講義は、平成十四年の四回生から始まり、平成十七年から、卒業三十周年・五十周年事業と合わせて年二回実施してきました。今までに講師を務めていただいた皆様は二百人を超え、講義では、自分が歩んできた中で培われた人生観や在校生諸君に送るメッセージ、高校生活の思い出や専門分野のお話などをお聴きすることができました。

一年 Bさん

私は先生が、女性として医師としてどんな人生を送ってきたかを知りたくて講座を受講しました。ご自身で「平凡な人生で」とおっしゃっていましたが、医師を志し、その夢をかなえ、これまで生きてきたことは全く平凡ではないと思いました。私は部活に所属していませんが、これといった趣味がありません。先生のようにならなりたいです。結婚して仕事と家庭を両立していきたいです。

一年 Cさん

私は音楽療法にとっても関心を持っていましたので、それに関係するお話が聞けて良かったです。音楽療法士になるには音楽大学に行くのがいいのか、それとも音楽心理学のほうで心理に関する学科のほうがいいのか迷っています。人の心を音楽で変えられる仕事に就きたいので、今日はためになるお話を聞かせていただきありがとうございます。

平成二十四年九月二十二日に実施した十四回生の特別講義の際に寄せられた生徒の生の声を紹介したいと思います。

一年 Aさん

一番感じたことは「勉強することに終わりが無い」ということ。僕の父も技術の現場で働いているが、最新の情報収集に余念がない。勉強することが一生の営みであるとするならば、自分の学びのペースを確立しなければならぬと思います。また、すべての分野をバラ

## OB会の活動

### 陸上競技部 創部百周年

大正時代初期に産声を上げた松本中学・松本深志高校陸上競技部は、平成二十五年に創部百周年を迎えます。OB会「天馬会」は八月に、ささやかながら記念式典を行うべく幹事会を中心に準備を進めています。

部の百年は、長野県に陸上競技が普及し始めて百年になることを意味します。松本城本丸にあった松本中学の運動場が、発祥の地でした。後に自らが極東大会の選手として活躍し、日本陸連の理事も務めた体育教師・野口源三郎先生の功績によりです。

以来今日まで、部に人が途絶えたことはなく、部に在籍した全ての人の名前・住所が残されています。忌まわしい太平洋戦争の開戦とともに中等学校運動部の対外試合は禁止されましたが、部員たちは毎日練習に打ち込み、技術の向上と記録の伸びに喜びを見いだしていました。

昭和三十年代になって、OBで東大法学部卒の鬼才、上島忠志先生を監督に迎えると、部の成績は一気に向上し、県高校の頂点に立ち続けました。上島先生はOB会組織「天馬会」の創設に尽力し、部の発展に限りなく貢献をしました。



平成二十五年年度生徒会長に就任しました野上誌穂です。

先日、平成二十五年年度生徒会が発足しました。選挙の影響で例年よりも遅い発足となりましたが、無事発足できたことに安堵しています。そうは言っても十一月の期末考査の時点で、い

な日本酒もその場の楽しさに華を添えています。数年前には、落研OB会のウェブサイトを見たという安曇野市の美術館の方からの要請で美術館の開館二周年を記念して落語口演を行いました。私は横浜在住でウェブサイトの運営を担当しているため依頼に対応できなかったのですが、地元在住の嶺村昇治君(33回卒)が落語二題を演じました。この模様は地元ケーブルテレビの二時間番組として放映されました。

### 志音会60周年 記念演奏会

「志音会」は音楽部のOBと在校生とが一緒に演奏活動を続けています。合唱と室内楽が合同で活動しており、混声合唱と弦楽アンサンブルによる通称「混弦」は、音楽部ならではの伝統となっています。全国各地から松本と東京に毎月集まり、練習を重ねています。

三月二十四日午後二時からキッセイ文化ホール(長野県松本文化会館)で志音会創立六十周年記念演奏会を開きます。モーツァルトの「レクイエム」とベートーベンの「交響曲第8番」を取り上げますが、オーケストラには音楽部のみならず吹奏楽部のOBも加わり、二管編成オケとして演奏いたします。創立六十周年演奏会での歌声、熱演。皆さんぜひお誘い合わせの上ご来場ください。(33回卒・宮内徹「志音会副会長」  
<http://shonkai.web.fc2.com/>)

### 正月恒例の落研OB会

落研(落語研究会)のOB会は、毎年一月二日に二十五回卒の渡辺訓己さんが経営する割烹「蔵」で開催されています。発足は三十年ほど前になりますが、開催日も場所も固定されていることもあり、一回も途切れることなく続いています。

落研だけあって、ジョークの飛び交う楽しい語り合いの場になっています。渡辺さんの計らいによる特別な日本酒もその場の楽しさに華を添えています。数年前には、落研OB会のウェブサイトを見たという安曇野市の美術館の方からの要請で美術館の開館二周年を記念して落語口演を行いました。私は横浜在住でウェブサイトの運営を担当しているため依頼できなかったのですが、地元在住の嶺村昇治君(33回卒)が落語二題を演じました。この模様は地元ケーブルテレビの二時間番組として放映されました。

## 「知しんもん」の活動を

生徒会長 野上 誌穂

まだに生徒会スローガンの原案すら固まっています。テストが終わったらゆっくりに考えて...などと考えていたら副会長から「うん、それは厳しいね」と笑顔で言われました。よくよく考えて予定帳に今後の予定を書き込んでみたら、その後開くのも恐ろしいことに。

余裕をもつことの重要性を身にしみを感じています。さて、今年度私が目指す生徒会について少し書かせていただきます。私は今年度、会員一人一人に「深志の生徒会を知ってもらおう」ことに重点を置いて活動したいです。昨年私が副会長を務

### 山岳部OB会は 海外登山も

山岳部は一九一八(大正七)年に設立され、今年で創部九十四年目となります。OB会である「松中・松本深志高校山岳部OB会」は設立二十二年目を迎え、毎年会報「みやまりんどう」を総会当日に発行しています。国内をはじめ台湾玉山へ、キリマンジャロ、ネパール・ヤラピークサウスなど海外登山も精力的に行っています。

二〇〇三年からは、活躍しているOB・OGによる公開講演会を総会と合わせて開催しています。二〇一一年は、日テレチーフディレクターとして「箱根駅伝」テレビ中継を実現したスカパーJSA T執行役員専務放送事業部長の田中晃氏(25回卒)による「箱根駅伝の舞台裏」と題した講演。二〇一二年は、「人生の最期をどのように迎えるか」介護現場から考えること」と題し、元長野県衛生部長で現在塩尻市教育委員を務める渡辺庸子氏(19回卒「OB会副会長」)による講演会を開催しました。

最近のOB会のトピックとしては、西村清亮会長(16回卒)と米倉逸生副会長(19回卒)の発案と情熱で、昨年再建された岳沢小屋にOB会の六人用テントが常備されたことです。昨年十月三十、三十一の両日、穂高・岳沢にテントをかつぎ上げました。設営にあたるた米倉副会長は「上高地小梨平のベースキャンプが豊まれてから何年経つだろう。今回、規模もシステムも違うが、漸く新しい安息の地が復活した。岳沢は涸沢に較べればその豪華さでは

### 蜻蛉抄

同窓会の広報活動を強化していくため、広報委員会の組織改正とともに会報の年一回発行が承認されました。

復刊同窓会報は、昭和三十四年に第一号が発行され、昭和三十年代は年に一度のペースで発行されてきました。その後は百十周年、百二十周年、百三十周年という周年事業の周知と協力要請を中心に発行されました。復刊第一号から五十有余年を経た今回、ようやく第十九号の発行に至りました。

同窓会の発展、活性化のためには、まずその活動実態や課題等について二万人余の同窓生に知っていただくことから始めなければなりません。昭和三十年代に做つての年一回の会報発行です。当時の厳しい財政状況のもと、同窓会に懸けた先輩の皆さまの熱い思いを偲ばずにはいられません。

同窓会ホームページ(H.P)もリニューアルしました。会報、HPそれぞれ媒体特性を生かしながら連携して情報を提供していきたいと考えています。広報委員会についてのご提言、ご意見を事務局までお知らせください。